

第 16 回 65 期テニスの集い

10 月 22、23 日、於:軽井沢グランドエクシブ

塩川明男 (6 組)

秋色深まる週末の土日、永久幹事布施修一郎君(6 組)の手配で、定例 65 期有志秋の軽井沢テニス会が開催された。参加者は布施・中山正光(11)・原田義則(3)・関賢治(2)・若柳直人(4)・宮沢憲一(10)・浅倉英樹(4)・牧野泰晴(1)・佐藤徹郎(7)・内堀信(6)夫妻・塩川の同期11人。同場所での本会は 9 回目、蕨などでの開催も含めると 16 回目という伝統あるテニス会である。にも拘らず、レポ担はテニスが何年振りという小生が書く羽目になり、主眼を前夜の楽しい、楽しい食事会を中心において以下レポートしたい。

まずは一同、9 月の卒業 50 周年記念同期会の盛会・成功を愛でて、代表幹事の布施君を労い、地元クラブビールの乾杯でスタート。しばし記念寄稿文の話題に。それぞれに思い出しながら皆の心は高校時代にタイムスリップ開始。みんなの寄稿をみてから「俺も何か書いておけばよかった」という声が多かったとの情報もあり。恒例の中華料理に舌鼓を打ちながら、今はこれでしょうと「真田丸」でしばし盛り上がり、M君より来年の「蕨の会」で、九度山など幸村ゆかりの地を訪ねる企画なども提案あり。ビールから紹興酒へと杯が重なるにつれ、青春の熱き思いが完全復活し、何も怖くなかったあの頃へと…。「大学時代に北海道で食べた陸稲はまずかった」とコメの話となり、TPP問題から話は「せいじ」へ突入。国を憂う心はひとつながら、議論は川の彼方と此方。しかしやがてまた一つになるのが同期の桜の美しさ。S君の同音語展開で柔らかい「せいじ」から、硬質の「せいじ」、「せいじ」の娘が誰それ云々(漢字を充ててください)と蘊蓄とうろ覚えの交錯する頃には、何本の紹興酒が空いたのか。次いで出ました長野県人お決まりの「信濃の国」。これも 2 番まで自信があるというS君が先導。覚えていないと思った歌詞がなぜか口からほとばしる、脳ミソの働きの不思議さよ。さあもう止まらない。あれやこれやあったはずだが、昔のことを覚えていた脳みそには現在のことを記憶するキャパがない、と今しみじみ。食後は幹事の畳部屋に集まり、胡坐座りの高校時代の再現。H教授提供の赤ワインをなめながら、クラブ活動やその他、その他の掘り起こしで夜も賑やかに更けていった。



開けて翌日のテニス。

9時より総当たりダブルスを開始。隣のコートでは若者が激刺と動き回りボールが此方にも飛んでくる。それを見ながら「歳はとっても自分の気持ちはあの頃と全く変わらないな」と誰かがつぶやく。熱戦は15時まで続き、今年もなぜか中山大人が最多勝。

皆さん歩く姿はどう見ても高齢者なのに、長年の経験と勘で華麗に球を捌くのは印象的であり、時折見せる奇跡のショットの数々は諸氏に至福の喜びを与えたものと思う。

だからこの会、止められない！

なお、来年5月に関君の手配で蕨大会が開催予定である。多数の参加を期待する次第。

(16年10月26日記)

